

学級文化が学力に与える影響

——学習意識・友人関係・対教師関係に着目して——

須藤 康介（東京大学大学院教育学研究科博士課程）

◆ 要約

- ◎本稿では、学級文化が生徒の学力に与える影響とその階層差を明らかにした。
- ◎分析の結果、学級文化は階層上位の生徒の学力にはほとんど影響を与えないが、階層下位の生徒の学力にはいくらかの影響を与えることがわかった。
- ◎第1に、学歴意識傾向の学級文化は学力に正の効果であるのに対して、職業意識傾向の学級文化は学力に負の効果であった。
- ◎第2に、活発的交友性の学級文化は学力に影響を与えないのに対して、いじめ潜在性の学級文化は学力に負の効果であった。
- ◎第3に、対教師親密性の学級文化は学力に影響を与えない（または負の効果である）のに対して、対教師信頼性の学級文化は学力に正の効果であった。

1 問題設定

本稿の目的は、神奈川県の大域を対象とした本調査データを生かし、学級文化が生徒の学力に与える影響、およびその階層差を明らかにすることである。

日本の学校は学級ごとの自律性や特殊性が高いと言われている。同じ学校・学年であっても、学級によって雰囲気が異なるということは、多くの人々が体験しているところであろう。いわゆる学級文化の存在である。『教育用語辞典』によれば、「学級文化」は「学級集団が共有する価値意識や規範、行動様式など」（山崎・片上編 2003: 82）と定義されており¹⁾、これまで蓮尾（1980）や狩野・田崎（1990）によって、学級文化が担任教師によってかなり異なることが示されてきた。また、学級文化は担任教師の影響だけでなく、

学年の切り替わりにおける学級編成で半ば意図的に形成されることや、学校行事などのイベントで偶発的に形成されることもあると考えられる。

このように存在は広く知られている「学級文化」であるが、学級文化が生徒にどのような影響を与えているのか（あるいは与えていないのか）は、これまで十分に実証されているとは言い難い。学級文化の効果という視点を早くに提示したものとして木原（1982）が存在するが、近年においては、次節で検討する西本（2003）が挙げられる程度であり、実証研究の蓄積は極めて少ない。中学生の生活の多チャンネル化が進行する中で、学級文化は生徒にそれほど大きな影響は与えていないのであろうか。それとも無視し得ない影響を有しているのだろうか。本稿では、学校教育のアウトプットの中でも主要な要素と位置づ

けられる学力に着目し、学級文化と学力の関連を分析する。

なお、学力を従属変数とした分析を行うにあたって、生徒の階層要因は無視できない。これまで菊谷・志水編(2004)などによって、学力の規定要因が階層によって異なることが示されてきたし、学校教育のアウトプットを考える上では、学力水準への影響と学力格差への影響を同時に検討する必要があることが指摘されてきたからである。後述するように、学級文化が学力に与える影響にも、少なからずの階層差が存在することが予想される。したがって本稿では、学級文化の効果の階層差にも着目して分析を進める。

2 先行研究の検討

前述のように、学級文化の効果を実証的に示した研究は極めて少ない。その中で注目すべきは西本(2003)である。西本は規律遵守的な文化がある学級では、家庭背景が学力に与える影響が小さいことを示しており、学級文化の効果を実証しているという点においても、学力の階層差を縮小させる教育実践を具体的に提言しているという点においても、その知見の含意は大きい。しかし、当該研究には、いくつかの課題が残されている。

第1に、調査対象が同和地区を多く含む特殊な地域であり、知見の一般化に留保がともなう。第2に、調査学級数が1学年あたり9~12しか存在しないため、分析結果の信頼性が高いとは言えない。第3に、規律順守的な学級文化がある学級とない学級それぞれにおいて、家庭背景変数が学力に与える影響を分析するという手法が採られているため、学級文化によって学力の階層差が小さくなることは示されているが、学級文化が階層上位と下位の生徒それぞれにどのような影響を与えるのかは示されていない。本稿では、神奈川県を広域を対象とした(詳細は「調査概要」を参照)大規模調査データに対して、後述のマルチレベル分析を行うことで、これらの課題

を克服する。

なお、学級文化に関する研究蓄積の少なさに反して、学校文化に関する研究蓄積は、特に近年増加している。その代表的なものが志水編(2009)の「効果のある学校」研究である。当該研究は、学力の底上げにつながる学校文化として、たとえば「前向きで活動的な学校文化」を提言している。しかし、本稿ではあえて、これら先行研究の蓄積がある学校文化ではなく学級文化を扱う。その理由は2つある。

第1の理由は、単純なものであり、これまで学校文化の効果は明らかにされているが、学級文化の効果は明らかにされていないからである。教育には学校単位でできることもある、学級単位でできることもあり、両者は同一ではないだろう。第2の理由は、教師個人にとって操作可能性が高いのは、学校文化よりも学級文化であると考えられるからである。須藤(2010)で指摘したように、学校文化の重要性を強調しすぎることは、一般の教師に無力感をもたらしてしまう可能性がある。なぜなら、学校文化は管理職の取り組みや学校の伝統によって規定される部分が大きく、一般の教師が容易に変えられるものではないからである。しかし、学級文化であれば、教師個人の創意工夫や学年を単位とした小規模な取り組みによって、ある程度まで操作可能であると考えられる。

3 分析手法と変数

学級文化の効果を見出すという本稿のリサーチクエスションに応えるのに有効な分析手法が、マルチレベル回帰分析である。マルチレベル回帰分析では、通常重回帰分析と異なり、学級レベル変数(たとえば学級文化)が生徒レベル変数(たとえば学力)に与える影響を精緻に分析することができる。

たとえば「学校の授業内容は高い学歴を得るために必要だ」という質問項目は、生徒レベルで見れば、単に意識を尋ねているにすぎ

ない。また、この意識と学力の関係を示したところで、学力が高いためにそのような意識を有したのか、そのような意識を有しているために学力が高いのか、因果の向きを同定することが困難である。しかし、この質問項目への回答を学級ごとに集計する（たとえば平均をとる）ことで、その学級でどのような意識が広がっているのかという「学級文化」を表す変数を作成することができる。このように集計された「学級文化」変数は、生徒一人一人にとっては周囲の「環境」を表す変数である。諸々の共変量を統制しても、このように設定した「学級文化」変数が学力に影響を有していたならば、学級文化の効果が存在すると判断できるだろう。

ただし、学級文化には様々な側面があり、それらを単一の指標で測定することは不可能である。そこで本稿では、蓮尾（1980）の学級社会学研究を参考にし、学習意識と友人関係と対教師関係という3つの側面から学級文化を捉えることとする。むろん、これらで学級文化を網羅することはできないが、分析モデルに対する冗長さなどを考慮し、暫定的にこの3つの側面に焦点を当てる。質問項目の詳細は以下のとおりである。学級文化変数の集計の手順としては、生徒質問項目を「あてはまる」を1とするダミー変数に割り当てた後に、学級ごとに平均した。なお、特別支援学級1学級は分析から除外した。

① 学習意識

学歴意識傾向：「学校の授業内容は高い学歴を得るために必要だ」（Q06G）を集計

職業意識傾向：「学校の授業内容は将来仕事をやる上で必要だ」（Q06F）を集計

② 友人関係

活発的交友性：「親しい友だちとは、遠慮なくなんでも言い合える」（Q18H）を集計

いじめ潜在性：「クラスメイトに馬鹿にされていると感じることがある」（Q19F）を集計

③ 対教師関係

対教師親密性：「学校に親しく話すことのできる先生がいる」（Q13C）を集計

対教師信頼性：「教え方が上手な先生が多い」（Q12A）を集計

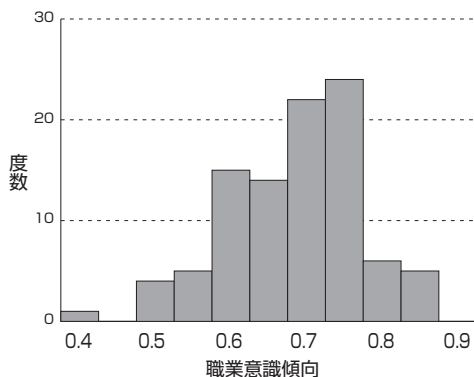
以下の分析においては、これら6つの学級文化変数を独立変数、簡易学力スコアを従属変数とするマルチレベル回帰分析を行うことになる。簡易学力スコアは、生徒に「 $x + 6 = 2.5x - 7$ という等式から x を求めることができる」「アサガオの花を見ておしべとめしべの位置が分かる」などの10項目（Q09）を尋ねて、それを0～10のスコア化した変数である。学力調査を実施したわけではないので、学力を捉える変数として十分とは言い難いが、すべての項目は中学校の学習指導要領に沿ったものであり、また、アルファ係数は0.749であるので、一定の信頼性は担保されていると考えられる。

また、マルチレベル回帰分析で学級文化の真の効果に接近するためには、生徒個人の属性や過去の学習状況、学級の社会経済的背景や規模の影響を取り除く必要がある。そこで本稿では、生徒レベル変数として、女子ダミー（Q02A）・通塾ダミー（Q25）・小5成績（Q33）・中1勉強戸惑いダミー（Q38B）、学級レベル変数として、通塾率（Q25を学級集計）・平均文化資本（後述）・学級規模（サンプリング資料より）を統制変数として投入する²⁾。文化資本／階層は家庭の蔵書数（Q31）、美術品の有無（Q30_02）、文学作品の有無（Q30_08）をカテゴリカル主成分分析で統合して設定した³⁾。

分析に先立って、そもそも「学級文化」が現実として存在するかどうかを確かめる必要があるだろう。学級文化が明確に存在しないのであれば、学級文化の効果を見出すという本稿のリサーチクエスション自体が意味のないものになってしまう。

学級文化の存在を確かめるため、6つの学級文化変数の中で最も学級による分散が「小さい」職業意識傾向の分布を図1に示す。こ

図1 職業意識傾向の分布



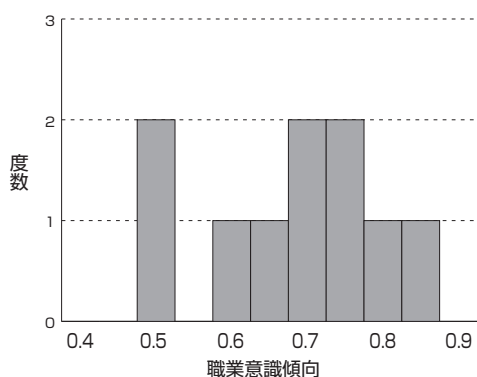
の図から、学級による生徒の意識傾向の差はかなり大きいことがわかる。また、図2は学級数が最も多い学校を抽出して、その学校内における職業意識傾向の分布を示したものである。この図から、同じ学校でも学級による違いは無視できず、学校文化とは独立にも学級文化が存在していることがうかがえる。ここにおいても、学校文化だけに注目することの限界が示唆される。

4 仮説

本節では、学級文化の効果、およびその階層差に関する仮説を設定する。まず、本稿で扱うこととした6つの学級文化変数が、生徒の学力にどのような影響を与えるのか（あるいは与えないのか）を検討する。

学歴意識傾向の学級文化は生徒を外発的に学習へ動機づけ、同時にその雰囲気が必ずしも高学歴を目指さない生徒をもある程度まで巻き込むため、生徒の学力を向上させると考えられる。良くも悪くも、受験競争が過熱していたと言われる1970年代の中学校のイメージである。職業意識傾向の学級文化も同様で、動機の種類は異なるものの、生徒を外発的に学習へ動機づけ、学力を向上させると考えられる。したがって、「学歴意識傾向が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高い」と「職業意識傾向が高い学級の生徒ほど、簡易

図2 職業意識傾向の分布（同一学校内）



学力スコアが高い」という仮説が導かれる。

活発的交友性の学級文化は、それ自体としておそらく望ましいものであるが、必ずしも学力向上につながるとは限らないと考えられる。生徒どうしの交友が活発であることは、向学習態度を高めることも低めることも、あり得るからである。一方、いじめ潜在性の学級文化は、安心して学習に取り組むことができる環境の欠如を意味するので、生徒の学力を低下させると考えられる。したがって、「活発的交友性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高いとは言えない」と「いじめ潜在性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが低い」という仮説が導かれる。

対教師親密性の学級文化は、生徒集団と教師集団の心理的距離が近いことを意味するものであるが、諏訪（1997）のように、少なくとも中学校段階においては、両者に一定の距離があったほうが学習の効率が高まるという主張もある。この主張が正しければ、対教師親密性の学級文化は生徒の学力を低下させる可能性がある。一方、対教師信頼性の学級文化は、生徒の向学習態度を高めるため、学力を向上させると考えられる。したがって、「対教師親密性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが低い」と「対教師信頼性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高い」という仮説が導かれる。

しかし、以上のような学級文化の影響はす

すべての生徒に均一に現れるものではなく、階層下位の生徒のみで明確に現れると考えられる。というのも、荻谷（2001）が指摘するように、階層上位の生徒は家庭の文化や学習塾の影響で、学校教育の様相にかかわらず、一定程度勉強に取り組み学力を獲得する傾向があると考えられるからである。階層下位の生徒は家庭の文化や学習塾による支えが相対的に少ないため、学級の雰囲気によって学力が左右されるのではなかろうか。そして、学級文化の効果が階層下位でのみ見られるということは、すべての階層の生徒を混合して見ると、学級文化の効果が明確に見られないということである。これらの議論をまとめた仮説が以下である。

- 理論仮説 1**：生徒全体で見た場合、学級文化は学力に明確な効果を与えない。
作業仮説は省略。
- 理論仮説 2**：階層上位の生徒にとって、学級文化は学力に明確な効果を与えない。
作業仮説は省略。
- 理論仮説 3**：階層下位の生徒にとって、学級文化は学力を規定する。
 - 作業仮説 3-1**：文化階層が下位の生徒では、学歴意識傾向が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高い。
 - 作業仮説 3-2**：文化階層が下位の生徒では、職業意識傾向が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高い。
 - 作業仮説 3-3**：文化階層が下位の生徒では、活発的交友性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高いとは言えない。
 - 作業仮説 3-4**：文化階層が下位の生徒では、いじめ潜在性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが低い。
 - 作業仮説 3-5**：文化階層が下位の生徒では、対教師親密性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが低い。
 - 作業仮説 3-6**：文化階層が下位の生徒で

は、対教師信頼性が高い学級の生徒ほど、簡易学力スコアが高い。

5 分析

5.1 理論仮説 1 について

表 1 が生徒全体を対象に、簡易学力スコアを従属変数とするマルチレベル回帰分析を行った結果である。詳細は省略するが、マルチレベル回帰分析の中でも、最尤法によるランダム切片モデル（回帰係数の学級間分散を仮定しないモデル）を用いた。

表 1 より、生徒個人の属性や過去の学習状況、そして学級の通塾率や平均文化資本が学力を規定しているのに対して、学級文化変数は対教師親密性がわずかに負の効果であることを除いて、学力に統計的に有意な効果を有していないことがわかる。対教師親密性が負の効果である理由としては、前述のように、生徒集団と教師集団の心理的距離が近すぎる場合、教師の権威が十全に機能しなくなることが推測される。いずれにせよ、その効果量は小さいので、理論仮説 1「生徒全体で見た場合、学級文化は学力に明確な効果を与えない」はおおむね支持されたと考えられる。

5.2 理論仮説 2・3 について

表 2 が文化階層別に、表 1 と同様の分析を行った結果である。階層別に見ると、階層下位でのみ、いくつかの学級文化変数が統計的に有意な効果を有していることがわかる。このことから、理論仮説 2「階層上位の生徒にとって、学級文化は学力に明確な効果を与えない」と理論仮説 3「階層下位の生徒にとって、学級文化は学力を規定する」はおおむね支持されたと考えられる。具体的にどのような学級文化が階層下位の生徒に影響を与えているのか、すなわち作業仮説 3-1～3-6 を順次検討しよう。

まず、学歴意識傾向は正の効果である。つまり、勉強は学歴獲得に役立つという雰囲気

表1 学級文化が学力に与える影響（マルチレベル回帰分析）

	独立変数	偏回帰係数	標準誤差
生徒レベル	女子ダミー	-0.226	0.083 **
	通塾ダミー	0.932	0.088 ***
	小5成績	0.916	0.041 ***
	中1勉強戸惑いダミー	-1.232	0.092 ***
学級レベル	通塾率	1.557	0.497 **
	平均文化資本	1.075	0.213 ***
	学級規模	-0.009	0.025
	学歴意識傾向	1.005	0.656
	職業意識傾向	-0.768	0.767
	活発的交友性	-0.504	0.618
	いじめ潜在性	-0.993	0.633
	対教師親密性	-0.876	0.506 +
	対教師信頼性	0.768	0.483
	(定数)	2.897	1.240 *
	決定係数	0.334	
モデル適合度	p=0.000		
N	2765 / 96		

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

表2 学級文化が学力に与える影響（マルチレベル回帰分析） 文化階層別

独立変数	階層上位		階層下位		
	偏回帰係数	標準誤差	偏回帰係数	標準誤差	
生徒レベル	女子ダミー	-0.197	0.115 +	-0.316	0.117 **
	通塾ダミー	0.807	0.125 ***	0.971	0.122 ***
	小5成績	0.815	0.055 ***	0.902	0.060 ***
	中1勉強戸惑いダミー	-1.127	0.123 ***	-1.247	0.134 ***
学級レベル	通塾率	1.717	0.662 *	1.383	0.575 *
	平均文化資本	0.886	0.282 **	0.673	0.257 **
	学級規模	-0.030	0.033	0.000	0.028
	学歴意識傾向	0.146	0.876	1.271	0.749 +
	職業意識傾向	0.184	1.016	-1.652	0.891 +
	活発的交友性	-0.460	0.808	-0.554	0.727
	いじめ潜在性	-0.660	0.828	-1.585	0.751 *
	対教師親密性	-1.117	0.680	-0.646	0.573
	対教師信頼性	0.606	0.652	0.912	0.546 +
	(定数)	4.297	1.663 *	2.747	1.422 +
	決定係数	0.310		0.296	
モデル適合度	p=0.000		p=0.000		
N	1397 / 96		1359 / 96		

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

の学級では、階層下位の生徒の学力が向上する。これは作業仮説3-1を支持している。学歴重視の文化は学校病理の一因として批判されがちであるが、学習への動機づけを失いがちな階層下位の生徒を学業に向かわせる側面もある。一方、職業意識傾向は作業仮説3-2とは逆に負の効果である⁴⁾。つまり、勉強は仕事で役立つという雰囲気のある学級では、階層下位の生徒の学力が低下する。この理由の考察は難しいが、可能性の1つとして、階層下位の生徒が仕事を思い浮かべるとき、中学校の学習とは直接関連しない仕事を思い浮かべることが多いということが考えられる。つまり、勉強は仕事で役立つという雰囲気は「仕事に役立つから勉強する」という意識を生み出す。その裏返しとしての「仕事に役立つのであれば勉強しなくていい」という意識も生み出し、そのことが階層下位の生徒を学業から遠ざけてしまうという可能性である⁵⁾。

次に、活発な交友性は統計的に有意な効果を有していない。これは作業仮説3-3を支持している。遠慮なく何でも言い合える雰囲気のある学級は、それ自体としておそらく望ましいものであるが、必ずしも学力と関連するわけではないようである。また、いじめ潜在性は負の効果であり、作業仮説3-4を支持している。つまり、学級内に他人を見下すような雰囲気がある場合、階層下位の生徒の学力は低下する。安心できる学習環境は、学校外の学習機会が限られている階層下位の生徒にとって、特に重要ということだろう。いじめの撲滅は、階層下位の生徒の学力保障という観点からも評価できる。

そして、対教師親密性は表2と同様に回帰係数は負であるが、有効ケース数が少なくもなっていることもあり、統計的に有意ではない。したがって、作業仮説3-5は支持されなかった。もっとも、負の効果とは断言できないが、標準誤差からして目立った正の効果でないこともまた確かである。すなわち、教師との親密性が築かれている学級ほど、学習指導が効果的になされているとは考えづらい。一

方、対教師信頼性は正の効果であり、作業仮説3-6は支持された。作業仮説3-5の知見と合わせれば、学力を向上させる学級文化として重要であるのは、「教師と生徒が仲良しであること」ではなく「生徒が教師のスキルを信頼していること」ということである。少なくとも中学校段階では、生徒と教師のインパーソナルな信頼関係の重要性を無視できない。

5.3 結果の解釈について

以上のすべての分析に関連する留保として、本稿で示したのはあくまで「学級文化の効果」であって「生徒個人の意識・行動の効果」ではないことを強調しておきたい。たとえば、表1で教師親密性の回帰係数が負であるという知見が得られたが、それは「教師と生徒が親密である学級文化では、生徒の学力が低い」ことを意味するのであって、「教師と親密な生徒ほど学力が低い」ことを意味するわけではない。実際、分析してみると、教師と親密な生徒ほど学力は高い。つまり、生徒個人が教師と親密であることは、学力に正の効果であるかもしれない（因果の向きはわからない）が、学級全体として生徒集団と教師集団が親密であることは、学力に負の効果であるということである。

この知見は、分析結果の解釈に注意を促すとともに、1つの興味深い事実を示唆する。それは、生徒一人一人にとっては、教師と親密になることが合理的であるが、そのことが学級集団全体にとっては非合理的になるという、いわゆる「合成の誤謬」状態が生じている可能性があるということである。教師の視点に立てば、生徒一人一人との関係がもたらすものだけでなく、それらの総体として生まれる学級文化がもたらすものにも注意を払う必要があるということになるだろう。

参考までに、生徒個人の意識・行動を独立変数に追加して表1および表2と同様の分析を行った結果を、一部抜粋して表3に示しておく。生徒の意識・行動と学力の因果の向き

表3 生徒の意識・行動を独立変数に追加したモデルでの偏回帰係数（抜粋）

	独立変数	全体	階層上位	階層下位
生徒レベル	授業は学歴に必要タミー	0.435 ***	0.376 **	0.486 ***
	授業は仕事で必要タミー	0.244 **	0.152	0.277 *
	遠慮なく言い合えるタミー	0.142	0.074	0.238
	馬鹿にされているタミー	-0.197 *	-0.165	-0.298 *
	教師と親しく話すタミー	0.397 ***	0.398 **	0.306 *
	教師は教え方上手タミー	-0.078	0.011	-0.144
学級レベル	学歴意識傾向	0.462	-0.059	0.514
	職業意識傾向	-0.925	0.108	-1.958 *
	活発的交友性	-0.630	-0.340	-0.990
	いじめ潜在性	-0.916	-0.441	-1.636 *
	対教師親密性	-1.393 **	-1.630 *	-1.047 +
	対教師信頼性	0.836 +	0.396	1.202 *

注：+：p<0.10、*：p<0.05、**：p<0.01、***：p<0.001。

が不明である点、互いに相関の高い独立変数が多数投入されている点などにおいて、あくまで参考程度の分析と捉えるべきものである。

6 結論

本稿では学級文化が生徒の学力に与える影響、およびその階層差を明らかにした。分析の結果、学級文化は階層上位の生徒の学力にはほとんど影響を与えないが、階層下位の生徒の学力にはいくらかの影響を与えることがわかった。具体的には、主に以下の3つの知見が得られた。第1に、学歴意識傾向の学級文化は学力に正の効果であるのに対して、職業意識傾向の学級文化は学力に負の効果であった。第2に、活発的交友性の学級文化は学力に影響を与えないのに対して、いじめ潜在性の学級文化は学力に負の効果であった。第3に、対教師親密性の学級文化は学力に影響を与えない（または負の効果である）のに対して、対教師信頼性の学級文化は学力に正の効果であった。

以上の知見から、中学生の生活の多チャンネル化が進行しているとされる現在にあっても、学級文化は特に階層下位の生徒の学力を

左右する要因の1つとなっていることがうかがえる。当たり前と言えば当たり前のことかもしれないが、学級は単なる生徒の集合体ではなく、良くも悪くも生徒の学力を左右する力を有している。そして、その影響は、家庭の文化や学習塾による支えが相対的に少ない階層下位の生徒にとって、特に大きいのである。これまでほとんど実証研究の対象とされてこなかった学級文化であるが、学力の階層差を変化させ得る要素としても無視できない。本稿の知見は、実際の中学校の学級経営においても、参照できる点が少なくないだろう。

本稿の限界は、学力の指標が厳密なテストに基づいたものではないこと、学級文化のうちで限定した側面についてしか分析が行われていないこと、そして学級文化が教師の介入や学級編成によってどのように形成されるのかにまで、分析が及んでいないことである。教育を生産関数と捉えれば、学級文化はインプットというよりも、どちらかと言えばスループットである。どのようなインプット（教師の振る舞い、学級活動など）がどのような学級文化を形成するのかを、今後分析する必要がある。

<注>

- 1) 厳密には、学級文化の中には「目に見える学級文化」と「目に見えない学級文化」がある。ここで示したのは「目に見えない学級文化」の定義である。同『教育用語辞典』によれば、「目に見える学級文化」とは学級の歌や旗、調度品の配置や掲示物、落書きや交換日記などのことを指す。
- 2) 学級レベルの統制変数として、大学進学希望率（Q40を学級集計）を投入することも検討したが、投入するとマルチレベル回帰分析の解が収束しなくなったため、取り止めた。大学進学希望率と通塾率の相関係数が0.543、大学進学希望率と平均文化資本の相関係数が0.638と高いことが原因と思われる。もっとも、このことは、通塾率と平均文化資本を統制すれば、大学進学希望率もほぼ統制できることを示唆している。
- 3) カテゴリカル主成分分析の結果、家庭の蔵書数の成分負荷量は0.704、美術品の有無の成分負荷量は0.692、文学作品の有無の成分負荷量は0.766であった。また、累積寄与率は52.0%であった。本報告書の他の章では、蔵書数だけから文化資本／階層を指標化していることが多いが、本章においては、文化資本をできる限り広く捉えるために、美術品や文学作品を含めている。平均文化資本は、学級ごとに文化資本の値を平均して算出し、文化階層は、生徒を文化資本の多寡によって均等二分割することで設定した。
- 4) 職業意識傾向の回帰係数が負となったことが多重共線性によるものとは考えづらい。多重共線性の診断を行っても、その傾向は見られなかったし、学歴意識傾向などを独立変数から除外しても、職業意識傾向の回帰係数は負である。
- 5) ウィリス（1977＝1996）が示したように、階層下位の生徒が学業達成を敵視する肉体労働職を志向しているというのは、日本の文脈では言い過ぎだろう。しかし、彼らが思い浮かべる仕事の内容は、荒川（2009）の言うところのASUC職業に近似するものが多いと考えられる。ASUC職業とは、人気があり学歴不問であるが稀少な職業のことを指し、具体的にはデザイナー・スポーツ選手・漫画家などである。これらの職業を意識している生徒が「仕事に役立つから勉強する」という雰囲気の中にいる場合、「自分には関係ない」と学業から遠ざかってしまうことはあり得ないことではない。

<引用文献>

- 荒川葉、2009、『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東進堂。
- 蓮尾直美、1980、「学級社会にみられる『社会的』交換——教師と生徒の関係を中心として」『教育社会学研究』35: 146-57。
- 狩野素朗・田崎敏昭、1990、『学級集団の社会心理学』ナカニシヤ出版。
- 荻谷剛彦、2001、『階層化日本と教育危機——不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂。
- 荻谷剛彦・志水宏吉編、2004、『学力の社会学——調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店。
- 木原孝博、1982、『学級社会学——一人ひとりを大切に作る学級経営の創造』教育開発研究所。
- 西本裕輝、2003、「学級文化と学力」原田彰編『学力問題へのアプローチ——マイノリティと階層の視点から』多賀出版、85-110。
- 志水宏吉編、2009、『「力のある学校」の探究』大阪大学出版会。
- 須藤康介、2010、「学力の階層差に関する実証研究の動向——日本とアメリカの比較を通して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』49: 53-61。
- 諏訪哲二、1997、『「管理教育」のすすめ』洋泉社。
- Willis, Paul E., 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Columbia University Press. (=1996、熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗 労働への順応』筑摩書房。)
- 山崎英則・片上宗二編、2003、『教育用語辞典——教育新時代の新しいスタンダード』ミネルヴァ書房。